

はじめに

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団
調査研究・担当理事 浅見俊雄

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団は2006（平成18）年11月に設立され、翌2007（平成19）年度から事業開始した財団で、主たる事業であるスポーツの実践者およびスポーツ医・科学などの研究者として世界の第一線で活躍しようとしているチャレンジャーをサポートする助成事業では、本年2017（平成29）年4月に第11期生を迎える。この個人への研究・体験助成と並行し、財団独自で日本のスポーツの一層の振興と発展に寄与できるような調査研究する組織を2012（平成24）年度から立ち上げ、日本の障害者スポーツに関する社会学的な調査研究等を進めてきた。

この報告書は、2016（平成28）年の「障害者スポーツの振興と強化に関する調査研究－ テレビ放送、選手認知度、大学による支援に注目して－」という研究成果をとりまとめたものである。

第1章でこれまでの4年間に実施してきた調査報告のまとめを行うとともに、今後の研究の方向性や、課題についての検討を短くまとめている。

第2章では、2016（平成28）年に開催されたリオ2016パラリンピックにおけるテレビメディア等でのパラスポーツに関する情報発信が急激に増大したことに関して、(株)エム・データからのデータ提供を受けて、北京、ロンドン、リオの3つのパラリンピック大会の比較を含めて、「テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査」と題して、多くの図表を使ってリオ2016パラリンピックでのテレビ放送が格段に拡大した実態を報告している。

第3章では、「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」の結果を報告している。インターネット調査による2,060人の回答からの分析では、テレビメディアでの露出は多くなっているとしても、競技者の認知度では、まだ健常者とは大きな差のあることが認められた。

第4章では、最近取り組みを始められた大学でのパラリンピアンへの支援について、オリンピックと同様にパラリンピアンへの直接的な支援も始めた日本体育大学と、日本身体障がい者水泳連盟と協定を結んで、プールの利用をパラリンピアンに提供しているなどの間接的支援を始めている立教大学へのインタビュー調査の内容が報告されている。

最後に、2016（平成28）年11月に東京で行われた、当財団主催のシンポジウム「障害者スポーツ選手発掘・育成システムのモデル構築に向けて」の内容が報告されている。

なお、これとは別冊で同じく本年度に取り組んだ『「トップスポーツ」の持続可能なシステム構築に向けた探索的調査1－ ジャパンラグビートップリーグに着目して－』の報告書も発行されるので、本報告書と併せてご利用いただきたい。